

ペトルス・ヨハニス・オリヴィと個体化の問題

石田 隆太

一 序

本稿の目的は、フランシスコ会のスコラ学者ペトルス・ヨハニス・オリヴィによる個体論を可能な限り整備することにある。彼が個体化の原理に関する当時の議論状況を「諸見解の無限な森」(infinita silva opinionum)と表現したことはよく知られているものの¹⁾、彼自身の個体論を主題とする研究はほとんどない。例外的にオリヴィの個体論を主題とする或る研究も、基本的には本質という概念に関する分析であり、オリヴィの思想をフランシスコ・スアレスのそれと比較することが主眼であってかつ短い²⁾。実は、オリヴィの個体論がそれ自体ではあまり注目されないことの理由として、それがいわゆる個体化の問題³⁾、つまり個体化の原理は何かを問う伝統的な問題そのものと直接向き合うものではないことを指摘することができる。そうした指摘を通じて、オリヴィの個体論を整備するという目的を果たすことにしたい。

行論は次の通りである。第一に、『第3任意討論集』第4問題に基づ

*) 本稿は JSPS 科研費 17J00136 および 18K12191 の助成を受けたものである。

**) 一次文献からの引用文はすべて拙訳であり、[] は訳者による補いである。

1) M.Giowala, *Singleness: Self-Individuation and Its Rejection in the Scholastic Debate on Principles of Individuation*, De Gruyter, 2016, 17.

2) W.Hoeres, "Der Unterschied von Wesenheit und Individuation bei Olivi", *Scholastik* 38 (1963): 54-61.

3) P.King, "The Problem of Individuation in the Middle Ages", *Theoria* 66 (2) (2000): 159-84.

いて、オリヴィ個体論の諸基礎を整理する。個体について前提としている事柄をまとめるとともに、彼の個体論は外在的な問題意識を抱えていることを見る（二）。第二に、彼の『「命題集」問題集』第2巻第12問題に基づいて、伝統的な個体化の問題に対する彼の立場を整理する。ここでは、彼の個体論が伝統的な個体化論とどの点でズレを持っているのかを、個体論の内在的な観点と外在的な観点の両方から指摘する（三）。第三に、『「命題集」問題集』第2巻第33問題に基づいて、彼の個体論が持つ外在的な問題意識についての理解を深める（四）。個体論の諸基礎から出発して、伝統的な個体化の問題に対する彼の立場と、彼の個体論に付随する外的な問題意識を合わせて見ることにより、オリヴィの個体論を一つの思想として見る視点を確保することが目指される。

二 オリヴィ個体論の諸基礎：『第3任意討論集』第4問題

最初に検討するテキストは、『任意討論集』（*Quodlibeta*）に属するもので、年代としては1289年から1292年の間に位置づけられる『第3任意討論集』の第4問題である⁴⁾。この箇所は、次節で詳しく検討する『「命題集」問題集』（通称『スンマ』（*Summa*）⁵⁾）第2巻第12問題に関する後年の並行箇所であるが、叙述が『スンマ』よりも簡潔であるため、この箇所に基づいてオリヴィ個体論の諸基礎を概観することにしたい。

目下の問題は、「同じ種の諸個体は実体に即して異なるのか、それとも附帯性のみによって異なるのか」（176, 4-5）⁶⁾である。オリヴィは最初に、実体に即して異なるという見解として、諸個体が質料に即して異なるという説を紹介する（176, 6-8）。そのうえで、これとは反対に、附帯

4) 著作年代については次を見よ：S.Piron, "Franciscan *Quodlibeta* in Southern *Studia* and at Paris, 1280-1300", Ch.Schabel (ed.), *Theological Quodlibeta in the Middle Ages: The Thirteenth Century*, Brill, 2006, 415-16. この箇所に関する分析としては次も見よ：M.Pickavé, "The Controversy over the Principle of Individuation in *Quodlibeta* (1277-ca. 1320): A Forest Map", Ch.Schabel (ed.), *Theological Quodlibeta in the Middle Ages: The Fourteenth Century*, Brill, 2007, 55-56. この箇所に関しては日本語訳も存在する：石田隆太「ペトルス・ヨハニス・オリヴィ『第三任意討論集』第四問題 試訳」、『宗教学・比較思想学論集』20 (2019): 59-67.

5) E.Bettoni, *Le dottrine filosofiche di Pier di Giovanni Olivi: Saggio*, Vita e pensiero, 1959, 27-30.

6) 以下でも『任意討論集』を参照する場合には、次のデフライア版の頁数と行数のみを併記する：S.Defraia (ed.), *Petri Ioannis Olivi, Quodlibeta quinque: Ad fidem codicum nunc primum edita*, Editiones Collegii S. Bonaventurae, 2002.

性のみに即して異なるという見解として、諸個体が量に即してのみ多数化されるという説を異論として紹介する (176, 9-10)。この二者択一の中から、彼は前者に同意を示す。曰く、「それら [すなわち諸個体] は実体に即して異なるが、無論のこと諸々の相異なる種差によって異なるのではない。なぜなら、その場合には諸個体が種的に異なることになるからである」(177, 11-12)。

オリヴィは、諸個体が実体に即して数的にのみ (つまり種的にはなく) 異なるという見解に同意したうえで、この見解の論拠を大別すると五つ示している。この五つを個別に見ていくことで、オリヴィ個体論の諸基礎が少しずつ明らかになる。

第一の論拠は第一実体ないし《suppositum》(担い手) に基づく。おそらくオリヴィは、個体を「担い手」として捉える限りにおいて、担い手として異なることと実体として異なることを同一視しようとしている。「担い手」の規定に含まれるのは、(何かを) 担うこと (supponere) に加えて、自体的に存立すること (existere)、いかなるものにも受容されずあらゆるものにおいて基底に立つこと (substare)、そしてあらゆるものを自らにおいて受容し安定化させること (stabilire) である (177, 13-18)。《supponere》以外の三つの要素は、実体の規定にも適合しうるものである。それゆえ個体は、担い手である限りにおいて、必然的に実体としても他の個体と異なることになる。

第二の論拠は附帯性に基づき、四通りの議論を示す。第一に、附帯性に対して本性的に先行する基体 (すなわち実体) は、附帯性よりも先にそれ自体で一である (つまりは個体である)。このことの理由は、どんな事物であれ存在することができるのはそれが数において一である場合のみだという個体主義的な前提である (177, 23-27)⁷⁾。個性が数的単一性と同一視されていることも重要である。第二に、個別的な附帯性は一なる個別的な基体においてのみ受容されうるがゆえに、基体である実体よりも先に個体でなければならない (177, 27-29)。第三は個の本質 (essentia individualis) を用いる議論である。オリヴィが「ソクラテス性」や「プラトン性」のような個の本質を容認していることが窺える。まず彼によ

7) 普遍に関するオリヴィの基本的な立場は、普遍は普遍性をただ知性においてのみ持つというものである (『スンマ』第2巻第13問題)。

れば、附帯性は基体である実体の本質を変容させるものではない。しかるに、諸々の本質が最高度に相異しているのは、一方の本質が他方の本質と端的に別である場合、つまり二個体が二つの個的本質を別々に持つ場合である。それゆえ、基体である実体の側で個的本質間に相異があることが求められる（177, 29-32）。第四に、諸々の附帯性の相異が見られるとしても、それは別様性（alteritas）をもたらすだけで、実体同士の他者性（alietas）をもたらすわけではない。これは、デフライアによる校訂版では指摘されていないが、ポルピュリオスに由来する論点である⁸⁾。

第三の論拠は《individuatō》に基づく。《individuatō》はここでは、普遍的なものが個的なものになる過程である「個体化」ではなくて、既に個体であるものが持つ「個性性」を指すと理解する⁹⁾。その理由は後述しよう。まずオリヴィによれば、一方の個体の個性性は他方の個体の個性性と数において別のものである。さらに、それら二つの個性性はそれ自体で相互に異なっている。なぜなら、何かによって数的一性が複数存在することが所与とされる場合、それら数的一性の相異は、まさにそれら自身が異なるものだということのみ由来するからである（177, 34-37）。第二の論拠でも見たように数的一性と個性性が同一視されているが、《individuatō》という言葉が「数的一性」と同じ意味で使われているので、これを「個性性」と訳出することにした。オリヴィは最終的に、諸個体それ自体の相異を諸実体の相異に還元する（177, 38）。

第四の論拠で彼は、「もし個性性が附帯性であるなら、附帯性が基体においてあるようにして、個性性は何らかのものにおいてある」（177, 39-40）という仮の想定をしたうえで、個性性が附帯性であるという仮定を最終的には帰謬法によって斥ける。附帯性として想定される《individuatō》もやはり「個性性」と訳出する方が適切だと思われる。オリヴィによれば、個性性よりも先なるものとしてその基体になりうる

8) 詳しくは次を見よ：石田隆太「トマス・アクィナスはポルピュリオスをどう理解していたのか——個体化の原理をめぐる議論を事例として」、『新プラトン主義研究』17 (2018): 39, 47-48n29.

9) 次に見る第四の論拠における言明をも考慮して、ピッカヴェも同意見である：Pickavé, "The Controversy", 55-56n126. ただし《individuatō》という動詞やそれに由来する分詞については「個体化」という訳語を使わざるをえなかった。

ものは種的本性のみである。それゆえ、基体としての種的本性そのものはいまだ個体化されていないことになるが、そうすると私とあなたという二人の人間が持つ個性の基体である種的本性（すなわち人間性）は実在的に同一になってしまう（177, 40-44）。実際に種的本性は個体においては個体化されているということが、オリヴィにとっては前提である。

最後に、第五の論拠は基体や附帯性の類や種に基づく。まず、基体は何らかの類や種に属する一方、附帯性もまた独自に何らかの類や種に属しており、基体と附帯性の両方に基づいて何か一つの類や種に属することはない。ところで個体的実体は（それが第一実体であることを踏まえるなら）、附帯性を含むあらゆるものよりも本性的により先に、それ自体で一（つまりは個体）である（177-78, 45-49）。ここでもオリヴィは個体的実体であることと数的に一であることを同一視しているが、類や種への帰属に対して個性への帰属が先行することに新たに言及している。

以上の諸論拠をオリヴィ個体論の諸基礎にしたがって捉え直すと次の通りである。第一の論拠によれば、個体は第一実体ないし担い手である。このことは、附帯性の基体である実体としての個体が附帯性よりも本性的に先行していることを含意する。そのうえで第二の論拠では、個性と数的一性の同一視と、そしてあらゆる事物は個体としてのみ存在することができるという個体主義的な前提が提示され、さらに個体的本質の存在も認められていた。《individuatō》に特化した第三と第四の論拠によれば、《individuatō》は「個性」を意味する。これはオリヴィの『スヌマ』でも共通して見られる点である。また第四の論拠は、種の本性が個体において個体化されている必要について触れており、これは第二の論拠で提示された個体主義的な前提と重なっている。第五の論拠は、これまでも頻出であった個性と数的一性の同一視を前提しつつ、個性への帰属が類や種の帰属に先行することを示している。

次にオリヴィは、自らとは異なる立場の見解を吟味することで自らの立場を先鋭化させていく。まず彼は、質料によって諸個体の相異を説明する見解に対して、諸個体が質料のみによって異なるわけではないことを強調する。もし諸個体が質料のみによって異なるとしたら、諸個体の間で形相は全く同一であることになるが、オリヴィとしては形相もまた

それ自体で多数化していることが望ましい (178, 50-57)。次に彼は、個体論の或る重要な問題に言及する。すなわち、一性 (ないし個性) が、それによって一 (ないし個体) であるものに対して、実在的に異なる何かを付加するの否かという問題のことである (178, 53-63)。この問題こそ、われわれが次節で検討する彼の『スンマ』第2巻第12問題の主題であり、この問題への解答は錯綜を極める。それもあってか、目下のところ問題への解答は『スンマ』の参照に代えられている。このことはおそらく、『任意討論集』の目下の箇所がそれだけ個体論における基礎事項の解説に重きを置いていることを意味する。

最後にオリヴィは、実体が量にのみ即して多数化されるという見解を批判する (178-80, 64-134)。この部分は、彼の質料や量に関する考えが窺える箇所ではあるが¹⁰⁾、非常に細分化された議論を展開している箇所でもあり、その全体をここで提示するのは困難である。それゆえ、その中で最後に置かれた議論 (180, 121-34) にのみ注目したい。なぜなら、個体論にとって外在的な問題意識がそこでは読み取れるからであり、こうした点を指摘することがオリヴィの個体論を理解するのに欠かせないからである。彼が言うには、量のみによる個体の複数化を主張することは「甚だ危険」(valde periculosum) である。この警告は、復活の教義に抵触する可能性に向けられている。彼によれば、量にのみ即して実体の個性が原因されるなら、例えば同じ位置 (situs) という次元量を持つ人々は誰であれ同じ個の本質を持つことになる。かくして「栄光に満ちていない身体と同じ位置に立つ栄光に満ちた身体は、前者と数において一であることになる」(180, 129-30)。ここでおそらく彼は、或る同一の人物においてであれ別々の人物においてであれ、復活前の身体を持つ人間と復活後の身体を持つ人間が本質において同等であることを問題

10) 質料については『スンマ』第2巻第16問題から第21問題で詳細な議論が展開されている。オリヴィの質料論については次を見よ：T.Suarez-Nani, "Pierre de Jean Olivi: La matière et l'esprit", *Études Franciscaines*, Nouvelle série 9 (1) (2016): 71-75; "Pierre de Jean Olivi et la subjectivité angélique", *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du Moyen Âge* 70 (2003): 235-62; M.Sullivan, "The Debate over Spiritual Matter in the Late Thirteenth Century: Gonsalvus Hispanus and the Franciscan Tradition from Bonaventure to Scotus", PhD Thesis, The Catholic University of America, 2010, 196-218; A.P.Estevez, *La materia, de Avicena a la escuela franciscana (Avicena, Averroes, Tomás de Aquino, Buenaventura, Pecham, Marston, Olivo, Mediavilla, Duns Escoto)*, Ediluz, 1998, 281-332.

視している。彼は、「栄光に満ちた身体について信仰が保持していること [すなわち復活の教義] が神にとってさえ不可能であると言わざるをえなくなる」(180, 130-31) とまで言うことによって、個性性に関する或る存在論的な理解が、神の全能性に抵触する危険性さえ指摘する。このことを個体論におけるオリヴィの外在的な問題意識として取り出すなら、オリヴィの個体論には、内在的な仕方でも個体について説明する視点とは別に、そのことの意義を問う外在的な視点（あるいはメタ的な視点）も導入されている。こうした二つの視点は彼の『スンマ』にも現れることになる。

三 「森の地図」¹¹⁾ を求めて：『「命題集」問題集』第2巻第12問題

それでは、いよいよオリヴィの『スンマ』に目を向けて、「無限な森」発言の出典でもある第2巻第12問題を検討することにしよう。問題の冒頭でオリヴィは、存在者 (ens) およびその存在 (esse) に第一に付随するものの中には一性がある一方で、《individuatō》は一性と同じだと思われるということを経由し、目下の問題に着手する (210)¹²⁾。このことから、数的な一性と個性性の同一視を『スンマ』でも早速認めることができるし、《individuatō》がやはり「個性性」の意味で使用されていることもわかる。目下の問題は、「個性性は、個体のうちにある種的に受け取られた本質に対して何かを付加するのか否か」(同) であり、ここからわれわれは「無限な森」に入る¹³⁾。オリヴィによる解答に主として依拠しながら、議論の流れを整理していくことにしよう。

問題に対する第一の見解によれば、個性性は諸々の附帯性の集合を意味する。この見解は、オリヴィも明言するように、伝統的にはポルピュリオスやボエティウスにしばしば帰される (212)。次に第二の見解によれば、個性性は質料的な何か (aliquid materiale) を意味する。この見解はさらに、質料的な何かは質料そのもののことを意味するという立場

11) この表現はピッカヴェの論文 (“The Controversy”) の副題から借用した。

12) 『スンマ』第2巻を参照する場合には、次のヤンゼン版の頁数のみを併記する：B.Jansen (ed.), *Fr. Petrus Iohannis Olivi O.F.M., Quaestiones in secundum librum Sententiarum quas primum ad fidem codd. mss.*, Vol. I: Quaestiones 1-48, Quaracchi, 1922.

13) 第12問題に関する解説としては次も見よ：Bettoni, *Le dottrine*, 215-23.

(II-1)と、諸物体において見られる質料的な附帯性(すなわち量)を意味するという立場(II-2)に細分化される(212-13)。『任意討論集』では、II-2は批判されていたし、II-1はそれだけでは不十分な見解だとされていたことを思い出しておこう。

これらの見解が個体性を附帯的なものや質料的なものとして理解するのに対して、第三の見解によれば、個体性は共通本性と実在的に異なる何かであり、しかもその何かは附帯的なものではなくて本質的で形相的なものである。この見解もさらに細分化される。第一に、その何かが事物に属する諸々の構成原理の固有化(appropriatio)ないし縮減(contractio)を意味すると考える立場(III-1)である。これはさらに二つに分かれる。一方は、質料が形相によって固有化され、形相も質料によって固有化されるというように、事物の構成原理同士が互いによって固有化されるというあり方を想定する(III-1-1)。他方は、質料や形相のそれぞれがそれ自体で自らの固有化を保持しているというあり方を想定する(III-1-2)。固有化(ないし縮減)のあり方については他に二つの可能性が示されるが、いずれにせよ、この第三の見解が最も細分化されていることはたしかである(213)。そしておそらくオリヴィとしては、個体性が何か一つの固有な規定だとして、第一および第二の見解以外の可能性すべてを挙げたであろうことが予想される。その証拠に、第四の見解は、個体性がそのような独立した規定であることを否定する立場として理解できる。というのも、この見解によれば、個体性は共通本性にも個体そのものにも何も付加しないからである(同)。

こうした状況をオリヴィはまさに「諸見解の無限な森」と言っていたのだった。この発言は、議論状況の煩瑣さについてのコメントとしてまずは理解できる。しかし彼は直ちにすべての見解を、個体性は何も付加しないという考えと個体性は何かを付加するという考えの二つに集約させたい(同)、前者(つまりは第四の見解)に対する批判を詳細に展開する(213-26)。特徴的なことに彼は、問題の単純化を行う一方で、目下の問題に対する自身の見解を示すことよりも、自身とは異なる見解の誤りを示すことに多くの労力を割いている。これは、『任意討論集』でも多少顕著であったが、『スンマ』においての方がさらに顕著である。

目下の問題に関してオリヴィは、自身の立場を基本的には仄めかすだけであるものの、個性性が何か一つの独立した規定であることについては肯定的であると思われる。実際に彼は、個性性は種の本質に対して何かを付加するという立場に共感している。

他方で、私が信じているところによれば、個性性は個体の〔種的〕本質に何かを付加するという前述のもう一つの見解——そこからの帰結として、個体化するもの (*individua*) と個体化されるもの (*individuum*) [すなわち種の本質] の間には実在的な差異が真に存在することになる——の方がはるかに共通的で穏当である。無論この見解は、上で言及されたように、複数の道に分割されるのではあるが、それでも、あらゆる道がこのこと [すなわち個性性が何かを付加すること] において互いに合致している。[略] なぜなら、質料は形相によって区別および限定され、形相も質料によって存立 (*existere*) の限定されたあり方やこと今存在に対して縮減されていると明白に思われるからである (226)。

末尾の記述から窺えるのは、オリヴィが特に共感を示している見解は、事物を構成する諸原理の縮減ないし固有化を考慮するもの (III-1) であり、中でも、その諸原理同士 (つまりは質料と形相) が縮減および固有化し合うもの (III-1-1) である。歴史的にこれはボナヴェントゥラの見解とほとんど同じものであると判断できる¹⁴⁾。

しかしながら、おそらくはボナヴェントゥラとの非連続性を示すものとしてオリヴィは、個性性は何も付加しないという見解と何かを付加するという見解の二者択一に対して、第三の調和的な立場を最後に提示する。ここから議論の段階が一つ上がって、個性性と、それが付加されるところのもの (すなわち種の本質) との違いについて、より厳密な議論が展開される。重要なのは、諸々の実在の本質 (*essentiae reales*)、実在的規定 (*rationes reales*)、ただ知性のみにおいて存立する規定 (*rationes*

14) Bettoni, *Le dottrine*, 243n3. ボナヴェントゥラの個体化論については次も見よ：石田隆太「何が個体化されるのか？ 二人のスコラ学者による個体化論とその存在論的前提」、『哲学・思想論叢』37 (2019): 3-6.

in solo intellectu existentes) の区別である。この区別の内実は徐々に明らかになっていく。

他方で、両方の見解の諸論拠はかなり強力なものであると思われるがゆえに、次のような人々が他にいた。すなわち、諸々の実在的本質、実在的規定、ただ知性のみにおいて存立する規定の差異や付加という何らかの区別による限りでのみ、両方の見解を調和することができ、またこの区別による限りでのみ、両方の部分の諸見解に満足することができる人々のことである (226)。

この第三の調和的な立場からは、個性は何も付加しないと主張していた見解は次のように捉え直される。付加されるものである個性性と、付加される先のものである種の本質は、それぞれが異なる実在的本質を持つわけではない。それゆえ、実在的本質の次元では、個性性が種の本質に対して何かを付加するわけではないことになる。

実際、彼らが言ったことには、付加されるものと付加される先のものの間にある実在的な差異を含意する、事物に即した何らかの付加がある。その場合には、質料と形相がそうであるように、付加されるものと付加される先ものは相異なる本質を持つ。そして、このあり方において彼らが言ったのが、個性性は個体の [種的] 本質には何も付加しないということであって、第一の見解の諸議論はこのことのみを結論づけている (227)。

種の本質の相異だけではなくて、質料と形相の相異も実在的本質の相異だと理解されているように見える。次に扱う実在的規定と合わせて考えるなら、種的形相という点で共通する要素が実在的本質であり、しかも質料はそれから除外されているようである。

ここで、哲学的にもしばしば注目を浴びてきた《rationes reales》¹⁵⁾

15) R.Pasnau, *Metaphysical Themes 1274–1671*, Oxford UP, 2011, 235–38, 247–52; Bettoni, *Le dottrine*, 160–243; M.J.Grajewski, *The Formal Distinction of Duns Scotus: A Study in Metaphysics*, CUA Press, 1944, 110–12. スコトゥスの形相的区別については次も見よ：本間裕

が登場する。

別の付加としては、諸本質の實在的な差異や何らかの相異性を全く含意しない、實在的規定に対する實在的規定の付加がある。そこでは、付加ということは固有にも端的にも言われず、ただ何らかのものに即して言われるのみである (227)。

オリヴィは、異なる實在的規定の例をいくつか挙げる。例えば、神における愛と智慧や或る一つのアイデアと別のアイデアである (227)。他には、理性的という種差にも注目する。オリヴィによれば、理性的という種差は、同時に形相でありかつ実体形相でありかつ個体の形相である。つまりは、理性的ということの原理でもあるし、人間という実体の構成要素でもあるし、或る一人の人間を他の人間たちから区別する原理でもある。というのも、理性的という種差においては、形相の規定と実体形相の規定と個体的実体の形相の規定が本質的には異なるからである。言い換えるなら、同一の本質の中に、これらの規定は全くもって中立的に包含されていて、しかもそれらは、われわれの知解のあり方にのみ即して区別されているだけではなくて、實在的にも区別されている (同)。オリヴィは、明言しないものの、個性性が種の本質に対して何かを付加するということを、實在的規定の次元において認めようとしている。

最後に彼は、こうした實在的規定と、ただ知解のみにおいて存立する規定の違いを述べることで、個性性と種の本質の相異が實在的規定の次元であるという見解を補強する。曰く、私から見て右にも左にもありうる石においては、右と左に関する何らの實在的規定も措定されず、知解のあり方にのみ即した規定の相異性しか措定されない。右と左に関する何らかの實在的規定がありうるとしたら、それによって石そのものが右か左にあると絶対的に言えるような極点がある場合のみである。同様にして、或る時には知られているが、或る時には知られていないかあるいは反対の仕方で抱かれている対象、また、或る時には愛され賞賛されているが、或る時には憎まれ非難されている対象についても、知解のあり

之「ドゥッス・スコトゥスの形相的区別について——意味論的観点から」、『哲学』(日本哲学会) 70 (2019): 250-65.

方のみならず規定の相異性しか措定されない(同)。

ここまでの議論を少しまとめることにしよう。個体化の原理が何であるのかを問う伝統的な個体化の問題に対するオリヴィの立場は次の通りである。まず、《individuatō》を個体性として理解したうえで、ボナヴェントゥラのように、個体性は、その事物の構成要素である質料と形相が互いを固有化することで得られると考える。この限りでなら、オリヴィは質料と形相の二原理を個体化の原理として考えていたと表現することもできるだろう。他方で、ボナヴェントゥラが《individuatō》について言わない論点もオリヴィには存在した。これはオリヴィの個体論が内在的に、伝統的な個体化論とのズレを持つ点でもあると思われる。すなわちそれは、或る事物における個体性はその事物の種の本質と実在的に異なるが、ただし実在的本質において異なるのではなくて実在的規定において異なるという論点である。当初は「本質的なもの」(あるいは「形相的なもの」として個体性が種の本質ないし共通本性に付加されると言われていたが、この点は実在的規定を考慮する立場からは少し修正の余地があることになる。なぜなら、実在的規定とは、実在的だが本質的ではないからである。

ただし、そのようにオリヴィが明言することはない。そもそも彼は、オリヴィ研究においてしばしば使われる言葉を用いるなら、或る種の「外交的手腕」を用いてしばしば自身の見解を示している¹⁶⁾。すなわち、自身の見解を非常に慎重な仕方であきらめかすことがある。このようなやり方は、彼が自らの思想によってしばしば迫害されてきたことに由来すると一般的に見なされている。代表的なものは清貧に関するものであろう¹⁷⁾。彼は、フランシスコ会総長も務めたボナヴェントゥラの講義にかつて列席した者として¹⁸⁾、個体化の問題についてはボナヴェントゥラの

16) Bettoni, *Le dottrine*, 218; Grajewski, *Formal Distinction*, 110; B.Jansen, *Die Erkenntnislehre Olivis: Auf Grund der Quellen dargestellt und gewürdigt*, Berlin, 1921, 103.

17) 彼の清貧に関する思想については次を見よ: D.Flood, "Poverty as Virtue, Poverty as Warning, and Peter of John Olivi", A.Boureau & S.Piron (eds.), *Pierre de Jean Olivi (1248-1298): Pensée scolastique, dissidence spirituelle et société*, Vrin, 1999, 157-72; D.Burr, *Olivi and Franciscan Poverty: The Origins of the Usus Pauper Controversy*, Penn Press, 1989.

18) D.Burr & D.Flood, "Peter Olivi: On Poverty and Revenue", *Franciscan Studies* 40 (1980): 47.

権威を尊重しようとしているのかもしれない。だが、彼が外交的手腕を行使しているということは、『スンマ』第2巻第12問題がオリヴィイの思想を知る上で重要な箇所であることを結果的に示している。

それとは対照的に、『スンマ』第2巻第12問題では、オリヴィイの強い立場表明も同時にいくつか見ることができる。そしてこの点は、彼の個体論が外在的に、伝統的な個体化の問題とのズレを持つ点だと見ることができる。個性は何も付加しないという見解に対する批判の中で、オリヴィイは次のように述べている。

さらには、もし量が量を持つものどもにおける個性および数え上げ (numeratio) の原因であるなら、われわれの諸々の魂や量を欠くあらゆるものども [例えば諸天使] においては必然的に、個性の類は別のものになり、全くもって同名異義的なあり方があることになる。これはおそらく、たんに偽であるだけではなくて、信仰に即しても危険だと思われる (217)。

『任意討論集』の場合と同様に、量が個性の原因だとする見解がここでも批判されている。オリヴィイによるこうした一連の立場表明は、彼が個体論について語る際の外的な問題意識を端的に示すものとして特筆に値する。ただし今度は批判の矛先が、非物的なものとの間で個性という規定が同名異義的になってしまうことに向けられている。彼によれば、こうした同名異義性を認めることは、事柄として間違っているのみならず、信仰にとっても危険なことである。おそらく想定されている論敵は、トマス・アクィナスのように、諸天使それぞれが一つの種であることを認めるような存在論を採用する立場である¹⁹⁾。それゆえ、われわれは最後にオリヴィイの天使論について少しだけ触れることにより、彼の個体論において見逃せない外在的な問題意識について理解を深めることにしたい。

19) トマスのな天使の存在論については次を見よ：石田隆太「トマス・アクィナスと天使の個体化——個体化の原理の射程をめぐって」、『中世思想研究』59 (2017) : 31-45.

四 天使の種問題：『命題集』問題集』第2巻第33問題

オリヴィは、他の多くのスコラ学者と同様に、『命題集』の構成に
ならって天使論を論じている²⁰⁾。『スンマ』第2巻第33問題は天使の種
(species)に関するものであり、あらゆる天使の種において、同一の種
に複数の天使が存在しうるかを問題とする(591)。この問題において彼
は、各々の天使がそれぞれにおいて一つの種を独占しているとする見解
を異教の哲学者たちやイスラームの学者たちのものだとしたうえで²¹⁾、
各々の天使が同一の種に属しているとする見解をより穏健ではるかにカ
トリック的な立場として擁護する(596-97)。ここでも彼は、諸天使が
通常の質料的物とは異なる仕方で種や個体のあり方を保持することを
認めようとする前者の見解に対して、「理性および真理に反対するのみ
ならず、信仰において甚だ危険でもある」(597)と強く言う。すなわち
ここでは、『スンマ』第2巻第12問題で見たオリヴィの外在的な問題
意識との連続性を容易に窺うことができる。

天使の種問題に関するオリヴィの議論は四つの論点によって、すなわ
ち諸天使の①持続、②場所との関わり、③能力、そして④何性ないし本
質によって進められるが(597-604)、今はこの最後の論点にのみ注目す
ることにしたい。この四つの構成は、彼によれば天使にとって外的なも
のから徐々に内的なものを見ていくという順序を体現するものであるが
(597)、われわれとしては、その内で最も内的なものである天使の本質
ないし何性に関する議論が、個体論に対するオリヴィのメタ的ないし外
在的な問題意識を示していることが重要である。

或る議論において彼は、論敵の立場を認めると、次のようなことが帰
結すると言う。まず、神はそれ自体で普遍的に存立するような天使の或

20) オリヴィの天使論全般については次を見よ：T.Suarez-Nani, *La matière et l'esprit: Études sur François de La Marche*, Cerf, 2015, 139-40; "Pierre de Jean Olivi et la subjectivité angélique", 233-316.

21) アリストテレス哲学やアヴェロエス主義に対するオリヴィの立場に関しては次を見よ：S.Piron, "Olivi et les averroïstes", *Freiburger Zeitschrift für Philosophie und Theologie* 53 (1-2) (2006): 251-309; D.Burr, "Petrus Ioannis Olivi and the Philosophers", *Franciscan Studies* 31 (1971): 41-71; O.Bettini, "Olivi di fronte ad Aristotele: Divergenze e consonanze nella dottrina dei due pensatori", *Studi Francescani* 55 (1958): 176-97. オリヴィの論述からはタンピエによる禁令の残響を聞くことができる。

る種的本性を造ることができる。そのことは、被造物に属する種以外のあらゆる規定（存在者、一、真などの超越概念的な規定を含む）についても、神は天使をそれ自体で普遍的に存立するように造ることができることを意味する。それゆえ神は、最も一般的で最も抽象的に(*abstractissime*)理解されるような存在性 (*entitas*) の規定全体をそれ自体で持つ存在者を創造することができることになる (603)。

このことの問題性が続く議論で示される。その議論によれば、さきほどの議論で示されたような存在者として諸天使が実際に創造されたと考えざるをえなくなる。なぜなら、諸天使の種の本性がそれ自体で自立するようなものであることが既に認められている以上、種以外の規定についても同様にそれ自体で存立するようなものとして考えざるをえないからである。それゆえ、いずれの天使も、最も一般的で最も抽象的な意味で、存在者であり真であると言わざるをえない (603-4)。オリヴィ曰く、「そのことから疑いなく帰結するのは、それら [すなわち諸天使] のいずれもが真に最高の存在者であり最高の神だということである」(604)。つまり「天使が普遍的なものだと想像する者は、天使が同時に被造物でありかつ神であると想像している」(同)。このようにして彼は、被造物としての天使を適切に理解するうえで、それぞれの天使が自らに固有な種を持つことを認める見解の問題性を強調する。なぜならそれは、天使の神格化や神の唯一性および全能性の否定という危険につながるからである。

五 結

これまでの行論は次の通りである。オリヴィの個体論における諸基礎を指摘することから始めて、伝統的な個体化の問題に対する彼の立場を『スンマ』において見た。それは端的にはボナヴェントゥラと共通するものであるが、彼の個体論にはまず内在的に、実在的規定をめぐる独自の議論が存在する。次に個体論にとって外在的なこととして、人間の復活や神の唯一性および全能性に関するキリスト教の教義との整合性に注意しているということも伝統的な個体化の問題とのズレとして指摘した。

最後に、「無限な森」発言の真意に関する或る理解を提案することで

論を閉じることにしたい。この発言はまず、木を見て森を見ないという格言のように煩瑣への拘泥に対する戒めとしても理解できるが、それだけではなくて、根本的な問題意識の欠如に対する戒めとしても理解可能である。スコラ学者が個体について論じることの意義についてオリヴィは自覚的であり、さまざまな教義との整合性に常に注意が向けられていた。それゆえ、個体化の原理が何であるのかという伝統的な問題に対して答えること自体は、彼にとってそれほど重要な問題ではなかった。むしろそうした伝統的な問題に対する彼の立場表明においては、個体論にとって外在的だが整合性を気にすべき神学的な問題への注意が常に存在していた。中世哲学の個体論は存在論にかぎっても多様な考えの宝庫であるが、それが他の議論領域との連関をどのように有しているかを網羅する必要があるだろう。